

法學指鑑

ヴェルベッキ氏口譯
忘筌社貞筆受

二

1

71

912

2止



保
9/2
2

東京大学
法学部

法學指鑑第二冊

明治廿五年八月十日
ダイゴ

○第一卷 自然法

第十條

自然法ノ説古ヨリ紛々トシテ未タ一定セス或
ハ謂ク自然法ハ性心學者想像説ノ如キ者ナリ
故ニ政府ナケレバ法律ナシトスト此説ノ如キ
ハ蓋シ政府ノ威權ヲ以テ人定法ヲ行フヲ知ル
ノミ是古昔希臘空論者ノ轍ヲ踵ク者ニテ誤レ
リト謂フ可シ夫レ法律ハ政府ノ力ニ依ルニ非

法學指鑑

第二冊

レバ必ズ行ハレズ然レドモ未ダ政府有ラザル
 時ト雖モ法律ハ必ズ人ノ守ル可キ者ナリ故ニ
 法律ハ主長ノ權ト其意固ヨリ異ナリ然ルヲ政
 府ナケレバ法律ナシトスルハ法律ト法律ニ力
 ヲ與フル者トヲ混スルナリ例ヘバ圓形ノ心點
 ヨリ生スル各方ノ徑線其距離必ズ齊一ナルノ
 理ハ圓規ヲ畫スルヲ待テ後ニ然ルニ非ズ未ダ
 政府アラズト雖モ法律及ビ正直ノ存スル猶ホ
 此ノ如キナリ古昔水夫ロベンソン、クリゾー絶
 島ニ漂著シ住居スル數年此島固ヨリ國ヲ為サ

ス故ニ又裁判所ナシ然レドモ若シ故ナクシテ
 クリゾーノ居ヲ毀ツ者アラバ其人ハ即チ法律
 ヲ犯スニ非ズヤ亦以テ證ス可シ彼ノ人定法ノ
 外法律ナシトスルハ是立法者造意ノ法ヲ善ト
 スルノミナラズ過甚ノ暴政ト雖モ亦之ヲ許ス
 ニ同ジキ者ナリ
 然レバ則チ自然法タルト法理タルトヲ問ハズ
 天ノ賦スル所良知ノ悟ル所道理ノ顯ハス所ノ
 戒訓集テ固ヨリ自ラ人ニ存ス人ト人ト相群ス
 ルニ及テ始テ生スルニ非ズ是獨リ道義ノ要旨

ナルノミナラス亦法律ノ規則ナリ法律ト道義
 トノ別ハ嘗テ説ク所ニ於テ明カナリ人定法ハ
 専ラ人ノ外義務ニ属スト雖モ人ノ固有ノ性質
 ニ因テ自ラ定リ人意ノ故造ニ出ルニ非ズ故ニ
 亦人意ヲ以テ之ヲ廢替スル能ハズ因テ之ヲ不
 易法ト云フ縱令主長自然法ヲ信ゼズ之ニ背イ
 テ法ヲ立テ人民ヲ苦シムルニ至ルモ惡ンゾ自
 然法ヲ滅スルヲ得ンヤ是他ナシ此理ハ人ニ先
 ダツテ既ニ存在セシ者ナレバナリコードナポ
 レオン稿本ノ緒言ニ曰ク人定法ハ萬國普通萬

古不易ハ自然法ヲ以テ原則トシ而シテ其政治
 ニ關スル所ノ道理ヲ抽テ之ヲ立ル者ナリト又
 ドロ、ン當今有名ノ法律學者ノ筆記ニ曰ク自然法ハ人
 民相資ケ社ヲ為ス性質ノ基礎タルハ我深ク之
 ヲ信ス人定法ノ未ダ有ラガル時ニ於テ固ヨリ
 自然ノ規則自ラアリ故ニ人ノ良知ノ感悟スル
 所ト法律ノ意トハ立法者ノ造意ニ出ルトスル
 ノ説ニ至リテハ之ヲ信ズ可カラズ彼ノ家族財
 産自由同等等ノ如キハ法律ニ因テ生ズルニ非
 ズ法律ハ之ヲ整理スル者ナリ而シテ其法律ハ

其基礎タル自然ノ外ニ出テス故ニ法律ハ造物者我ニ賦スル所ノ性理ニ愈近クシテ愈完全ナリトス

自然法學ノ用

第十一條

佛國人ノ學ニ就クヤ必先ヅ其學ノ何用タル可キヲ詳ニス而シテ自然法學ニ至テハ其何用タルヲ知ラズ人皆以テ無用トス甚キハ則チ前條ニ云フ所ノ如ク自然法アルコトナシトシ或ハ謂ク自然法無キニ非ス然レトモ法律ヲ學ビ法

律ヲ解スルニ於テ嘗テ學者ノ為ニカアル者ニ非ズト此ニノ者皆非ナリ理學ノ論スル所ニ於テ或ハ之ヲ取ラガル者アリト雖モ力ヲ自然法學ニ用ルハ法律學者ノ為ニ大ナル利益アル者トス

萬事ノ原理ヲ考索シ國ノ制度ノ因テ立ツ所ヲ研究シ又其制度ハ必ズ然ル可キノ理ヲ知ント欲スルハ人ノ常情ナリ此常情ヲ達セシムルハ專ラ自然法學ニ在リ縱令自然法學ハ力法律ノ原因ト正直ノ基礎トヲ明ニスルニ止ルト雖モ

テ亦何ニ據ランヤ況ヤ其利益之ニ止ラザルヲ
 ヤ
 夫レ自然法學ハ人定法ヲ學ブニ易カラシメ而
 シテ法ヲ立テ法ヲ釋スル亦必ず其力ニ據ル法
 ヲ立ルニ就テ之ヲ言ハバ彼ノ水路嚮導者ノ必
 ズ磁針ニ頼テ以テ船ヲ導クガ如シ自然法ハ立
 法者ノ磁針ナリ立法者事ニ當リ目的ナキトキ
 自然法ニ據ラザレバ民法上ニ於テハ婚姻財産
 相續等ノコトヲ整理スル應ニ之ヲ如何ス可キ

刑法上ニ於テハ刑ノ本旨ト處刑ノ權衡ヲ定ル
 應ニ之ヲ如何ス可キ國政學上ニ於テハ國ノ目
 的ヲ達スルノ方法ヲ立ル應ニ之ヲ如何ス可キ
 且ツ旭日出テ而シテ宿霧散ス自然法ハ猶旭日
 ノ如シ自然法ニ非ズハ争カ善ク謬説人ヲ迷惑
 セシムルノ烟霧ヲ解散セニヤ法ヲ釋スルニ就
 テ之ヲ言ハバ自然法學ハ先ツ學者ヲシテ正理
 ニ感發セシム而シテ國ノ法律完備マト云フト
 雖ヒ條件ノ欠遺ナキト法意ノ不了ナキトヲ保
 ツ能ハス其欠遺ヲ補ヒ其不了ヲ明ニスルハ唯

自然法ノ力ニ因ルノミ
 佛國ノ立法者ハ人定法ノ不足ヲ補フ必ズ自然
 法ニ據ル裁判官ノ自然法ニ據テ以テ法律ノ不
 備又其不委ナル所ヲ處分スルハコルドナボレ
 オン前論ニ定ムル所ナリコルドナボレオン稿
 本第五編第十一條ニ曰ク民法ノ條件不備ナル
 トキハ裁判官ハ正義ニ代リテ之ヲ處分スル者
 ナリ正義トハ自然法或ハ一般ニ認許サレタル
 所ノ慣習法ヲ云フナリ
 又コルドナボレオン稿本ノ緒言ニ曰ク若シ法

律ノ不備ナルトキハ慣習或ハ正義ヲ考索ス可
 シ正義トハ法律ノ不備不委又抵觸スルコトア
 ル時ハ即チ自然法ニ據ルナリト此理ハコルド
 ナボレオン第五百六十五條第千百三十五條及
 チ千八百五十四條ニ於テ亦明カナリ故ニ佛國
 ニ於テハ自然法學ハ法律ヲ釋シ又法律ヲ施行
 スル者其補欠ノ為ニ必要トス而シテ更ニ又必
 要トスル者ニアリ立法者人定法ヲ立ルハ規矩
 必ズ自然法學ニ在リ國政學者國ノ目的ヲ達ス
 ルノ方法ヲ識ル必ズ自然法學ニ在リ人民政府

ノ設ク我ヲ保護スルニ在ルヲ信シテ政府ヲ親
戴スルノ心ヲ固クスル亦自然法學ニ在リ

自然法沿革ノ概略

第十二條

自然法ハ基督教ヨリ生シ近世ニ至テ一派ノ學
タリ東洋各國及ヒルパンテイズル天ル地ルヲ神トス
ノ國ニ於テハ嘗テ自然法アルヲ知ラザルナリ
夫レルパンテイズルハ天地萬物ヲ神トシ又人民
各自ト政府トノ別ヲ知ラズ然シテ天地萬物ヲ
以テ差等シ各種ノ神トスル猶封建國ノ君臣各

種ノ等差ニ因テ其威權アルガ如シ其真神ノ一
ナルヲ知ラザル争カ善ク自然法ノ理ヲ知ルヲ
得ンヤ昔希臘國人始テ人々自由ノ權アルヲ發
明ス然レドモ未ダ人ノ固有ニシテ必ズ他ノ犯
ス可カラザルノ權ナルヲ知ラズ尚ホ政府ヨリ
與奪スル者タリピタコール、プラトン、アリスト
ト、等ノ如キ碩學ト雖モ彼ノ奴隸ノ制夫婦ノ倫
ナキ其他自然法ニ悖ルコトアリト雖モ嘗テ之
ヲ非トセズ遂ニ自然法ノ理ヲ啓發スル能ハズ
羅馬ノ時代ト雖モ亦未ダ自然法ノ理ヲ知ル者

法學指裁

第二冊

二七

ナシセ子ック、シセロン、ノ自然法ヲ説ク其實ハ道義ノミ其他ノ學者ナキヲリスラニヨリ自然ノ義及ビエクイタッスル正義キヲ論ズル其意亦道義ノ外ニ出デズ基督教人ノ精神ヲ一洗シ真神ノニナキヲ明ニシ人々同權ノ域ニ進ムノ今日ニ至テ自然法學亦今日ノ地位ニ進ムコトヲ得タリ古昔基督教ノ始テ興ルヤ政府ノ改革ニ於テ甚タカアリトス然レドモ未ダ法律ト道義トノ別ヲ立テズ千五百年ヨリ千六百年間ニ於テ始テ人ノ自由權アルヲ知り自然法ノ基礎ヲ發明ス是

ヨリシテ教法ノ改正益々進ミ論理ト史學ノ研究ヲ以テ制度上ノ得失ヲ論シ及ビ各自ノ意見ヲ論述スルノ自由ヲ得タリ是ニ於テノランクトン、オウゲン、ドルフ、アウベク、ク、エン、テリー、ヘ、ミン、グ、及ビビンクレル等始テ自然法ノ論ヲ著ス然レドモ尚法律ノ論理ヲ以テ教法ノ區域トシ自然法ト教法トノニ學ヲ別タズ義務ノ内外アルヲ明ニスルニ至ラズ始テ義務ノ内外ヲ定メ自然法學ヲ興セシハ和蘭人ヒューゴ、グロシニストス千六百二十五年グロシニ、巴理ニ於テ平戰

規條ヲ著ス此書實ニ自然法ノ活用ヲ廣クスル
 ノ濫觴タリ是ヨリシテ教法ト自然法トヲ區別
 スルノ論始テ定ル而シテ世ノ學者グロヒュスノ
 説ニ從フ者アリ之ヲ駁スル者アリ紛然輩出シ
 テ各其見ヲ爭フ十八世紀ノ末ニ至リウルフ、グ
 ロヒュス、トマヒュスノ論ヲ合シテ一トス此論最モ
 瑞西學者ノ主張スル所タリ獨逸學者亦力ヲ自
 然法ニ盡シ各種ノ新説ヲ著セリ其最善ク自然
 法ノ理ヲ講明セシハカンツヲ以テ第一トス當
 時ノ學者翕然トシテ之ヲ宗トス而シテヘイヘ

ル、スタールノ徒アリテ痛ク之ヲ駁シ一ニ細
 事ヲ論斥セント雖其原則ニ至テハ遂ニ動カス
 能ハザリシナリ

第十三條

十七世紀ニ於テ佛國自然法學ノ進步幾ント他
 ノ諸國ト同一ナリグロヒュス及ヒビュブアンドル
 フハ自然法學ノ教師ニシテ其著述ハ十八世紀
 ノ末ニ至ル迄學校ノ課程書タリ此時ニ當リテ
 ウルフ及ヒ獨逸學校ノ論説ハ和蘭及ヒ佛ノ瑞
 西ヨリ佛國內ニ流傳セリ蓋シ佛人ノ和蘭ニ遁

レタル者ウルフノ著書ヲ翻譯シ又ビュルラマキ
 ー、ブワテールド、左リース、ビカー、ハ佛ノ瑞西ニ
 於テ常ニ自然法ヲ教示セシノ故ヲ以テナリド
 マー、アギュイソーノ著述書中ニ於テ一ニ自然法
 ノ原理ヲ見ルニ足ルモノアリ他ノ法律學士ハ
 勿論ポチエート雖ビルラマキー、ウルフノ説ノ
 外ニ出テズシテ十九世紀ノ初ノニ至ル迄自然
 法學ノ進歩ハ依然タリプルードン、ツリーエー
 ノ如キ才識ヲ以テ法理學アルヲ疑ハサルモ獨
 逸ニ於テ充備セシ自然法學許多ノ著書アルヲ

知ラス又佛ノゼラー、ルドレーヌ、パール及ビペ
 ルー等自然法ニ付テノ書ヲ著セシト雖亦未獨
 逸ノ諸説ノ進歩セシヲ知ラサリシナリ
 千八百二十二年佛國「レストラシヨ」政府路易十四
 世ヨリ查理十世迄ノ間ハ嘗テナポレオン帝ノ
 十五年間ノ回復ヲ云フハ嘗テナポレオン帝ノ
 理論黨ヲ厭忌セシ如ク亦理論黨ヲ厭忌シテ當
 時巴理法學校ニ存在セシ所ノ自然法學ノ一ノ
 科目ヲ廢シタリ是ヲ以テ自然法學依然トシテ
 進止セス千八百三十年以來自然法ト法理トノ
 區域ニ於テ感覺スル所アリ當時數人ノ著書ヲ

以テ之ヲ徵スルニ足ル即フリトールミニエ
 一、エフ等著書是ナリ如是感覺ノ増進スルハ
 甚ダ希望スル所ナリ抑佛國法律家ノ性質ハ高
 尚ニシ且周密ナル形狀ナリ然レドモ之ニ偏ス
 ルトキハ却テ其價直ヲ失ハン自然法學ノ法律
 家ノ為ニ必要ナルハ既ニ前十一章ニ於テ之ヲ
 説明セリ

○第二卷 人定法

第十四條

人定法ノ意第九條中ニ於テ之ヲ概論ス今又其

詳ナルヲ説カン人定法即チボレチーヴトハ數
 學ニ言フ所ノボシチーヴ陽ノ詞ト異ナリドロ
 アポシチーヴハ羅匈語ユス、ポシトムノ轉スル
 者ナリユス、ポシトムトハ國民造立スル所ノ法
 ヲ云フ夫レ自然法ハ唯道理ノミニシテ形跡ノ
 徴ス可キ者アルニ非ズ人定法ハ之ニ反シテ人
 人ヲシテ必ず遵守セシムベキ形跡ヲ顯ス即チ
 國ノ主長明示シ或ハ默許スル所ノ法則是ナリ

○第一章 人定法ノ根源

第十五條

前條ニ於テ人定法ハ明示ト默許トノ二者ニ因ルヲ論ズ此二者即チ其根源ナリ明示トハ主長立法權ヲ以テ制定スル所ノ法則ヲ公告セシヲ云フ默許トハ國民ノ風習ニ因テ自ラ成立チシ法則ヲ主長默許セシヲ云フ人定法ヲ分テ成文法ト不文法トニ分ツハ希臘羅馬ノ古時ニ於テ既ニ之ヲ明ニス然レドモ其意今日ト異ナリ羅馬法學者ハ其根源ノ何タルニ拘ハラズ都テ刷行ニ係ル者ヲ成文法トス故ニ「レスポンス」プルデントム聖人ノ意見亦成文法タリ風習ニ因ル者ト

雖亦然リ唯口碑ニ因テ存スル者ノミ之ヲ不文法ト云フ近世法學者尚ホ其意ニ從フ今日ニ至テ其意大ニ變ス國ノ主長法式ヲ以テ公然布告セシ者ヲ成文法ト云ヒ風俗慣習ニ因リ裁判ノ定則トナリ主長之ヲ默許スル者縱令刷行ニ係ルト云ヘドモ之ヲ不文法ト云フ是或ハ人ニ詳諭シ或ハ學生ヲ裨益センガ為慣習ト雖モ刷行スルアレバナリ故ニ成文法ハ立法權ヨリ出テ明示スル者ニシテ不文法ハ立法權外ヨリ成立ツ者ナリ之ヲ詳説スル左ノ如シ

○第一款 成文法即法律

第十六條

凡法則立法權ヲ以テ制定シテ國民遵守ス可キ
 之ヲ成文法ト云フ元老院決議書法律及ヒ布令
 等ヲ問ハズ盡ク成文法ニ非ザルナシ而シテ法
 律ナル詞ハ其總稱ニシテ凡人ノ遵守ス可キ者
 皆法律ナリ州長邑長ノ決定書ハ其管轄内ニ於
 テハ即チ法律ナリ故ニ法律ノ意廣ク之ヲ言ヘ
 バ唯主長ノミナラス其任ニ膺ル者ヨリ出ス所
 ノ規則ハ皆法律トス而シテ國民ハ其法律ノ何

タルヲ問ハズ必^ズ盡ク之ヲ遵守セザル可カラズ
 苟モ之ニ背クトキハ加ルニ刑罰ヲ以テス狭ク
 之ヲ言ヘバ立法府ノ制定スル者ノミ是ヲ法律
 トス而シテ又立法權ヨリ尊キ者ノ制定ヲ要ス
 ル所ノ法律アリ君權民權ヲ定メ國ノ體裁ヲ立
 ルノ憲法ニシテ之ヲ國約或ハ建國法ト云フ此
 法律ニ至テハ立法權未ダ定ラザル前ニ於テ國
 民一般ノ物ヲ立ル權自建國ノ始ト名代人ヲ以
 テスルト問ハズ大^キ小^キノ法則ヲ制定ニ因テ成
 立ツ者ナリ而シテ立法權亦此法律ニ因テ立ツ

第十七條

人定法ハ之ヲ通知セシメサレバ國民ヲシテ必
 ズ遵守セシムルノ力ナキモノトス之ヲ通知セ
 シムルハ布告ニアリ舊法ニ曰ク正式ノ布告ア
 ラザレハ法律ハ人ヲシテ遵守セシムルノ力ナ
 シト蓋シ布告ノ方法ハ各國ノ憲法ニ因リ或ハ
 其書式ニ從テ異ナリト雖必國民ヲシテ其法律
 ヲ知ラシム可キノ効ヲ生ズルハ一ナリ而シテ
 國民ハ布告アリテ後ハ法律ニ從ハサルヲ得ズ
 故ニ布告アリシ以上ハ其法律ヲ遵守スルヲ國

民第一ノ義務トス縱令未ダ知ラズト云ト雖之
 ヲ犯ス者ハ其責ヲ辭スルヲ得ズ如何トナレバ
 布告ノ後ハ國民既ニ其法律ヲ知レリト看做セ
 バナリ然レドモ看做ス者ハ唯之ヲ推察スルノ
 ミ故ニ法律ノ類ニ從テ之ヲ知レリト看做マア
 リ之ヲ知レリト看做サバルアリ佛蘭西ノ法律
 ニ於テハ民法ト刑法トニ因テ其別ヲ生ス刑法
 ニ於テハ必ず之ヲ知レリト看做ス故ニ犯者ハ
 必ず其刑ヲ適ルヲ得ズ民法ニ於テハ之ニ異
 ナリ羅馬法ノ法ヲ知ラザルヲ罪トスルノ條ヲ

取ラズ故ニ法律ヲ誤解シ或ハ法律ヲ知ラズシ
 テ之ニ背ク者ハ事ヲ誤認シ或ハ事ヲ知ラザル
 ガ為ニ欺カル者ト同シク其誤解或ハ知ラザ
 ルヲ以テ辭トシテ其責ヲ遁ルヲ得ベシコト
 ドナホレオン第一千百十條第一千三百七十七條ト
 ヲ第一千三百五十六條第一千五百十二條トニ参照
 シテ知ル可シ

第十八條

法律ハ布告ノ後ニ於テ始テ國民ヲシテ遵守セ
 シム可キカアルノ理ニ因テ將來ニノミ施ス

ベクシテ既往ニ及ボス可カラサルノ理ヲ生ス英
 國ノバコン曰クヤヌスニ面ヲ見一面ハ將來ヲ
 見云ハ法律ノ取ラザル所ナリト巧ナルカナ言
 ヤ若シ法律ヲ以テ既往ニ及ボシ之ガ為ニ人ノ既
 得タル所ノ權利ヲ奪ヒ其既成シ得タル者ヲ損
 スルニ至ラハ人ノ自由ハ何ヲ以テ存センヤ故
 ニ羅馬ノ法律ニ曰ク法律ハ既往ニ及ボス可カラ
 スト又コトドナホレオン第二條ニ曰ク法律ハ
 將來ノ事ヲ定ムルノミニシテ之ヲ既往ニ施行
 ス可カラスト此條ハ裁判官及ビ法律ヲ執行フノ

職ニ與ル者ノ為ニ之ヲ戒ムルナリ然レドモ立
 法者ハ然ラズ國ノ必適スル所ニ在テハ則法律
 ヲ既往ニ及ボスノ權ナカルベカラザルナリ例
 ハ法律改正ノ後ニ於テ罪ノ發覺セル者其犯
 改正以前ニ在リト雖改正ノ律輕ケレバ之ヲ以
 テ夏断シ又新法ヲ立レハ舊法ヲ廢止ス等
 ノコトハ立法者ノ定ムベキ者ナルヲ云フ

第十九條

人定法ノ主旨ハ事ヲ禁シ又事ヲ命スルニアリ
 故ニ其禁セザル所命セザル所ハ皆人ノ自由ニ
 任セ他ヨリ之ヲ妨グ又之ヲ制スルヲ得ズ是ヲ
 以テ九法律ハコトドナポレオン第四百四十四條

第四百四十五條ノ如キ特別ノ場合ノ為許スアル
 ニ非サルヨリハ總テ禁スルト命スルトハ主旨
 ヲ出ルコトナシモデステン曰ク法律ハ命スル
 コト禁スルコト許スコト罰スルコトノ四ノ功
 カヲ有スト而シテ刑法ハ此四者中ノ一部分ニ
 限ルニ非ズ或ハ命スルノコトタルアリ或ハ禁
 スルノコトタルアリ然レドモ禁ト罰ト同視ス
 可ラズ何トナレバ罰ナキノ禁アリ禁ナキノ罰
 アレバナリ賊盜殺傷ノコトハ十戒ノ外各國別
 ニ明禁ナシ然レドモ人民ハ之ニ因テ各其國ノ

禁タルヲ知レル者ト看做ス故ニ刑法ハ直チニ其
犯ス所ノ輕重ニ從テ其罰ヲ擬定スルモノトス
第二十條

法律ハ上ニ主長ヨリ下ニ細民ニ至ル迄一般之ヲ遵
守ス可キ者トス

古諺ニ曰ク國君ハ法律ニ於テ自由ナリト此諺

ハ國君ハ欲ク法律ヲ翻弄シ又ハ法律ノ權限ヲ
破ルコトヲ得可シト云フノ謂ニ非ズ然ルヲ若

羅馬法學者時ニパッピヤイッペヤイ法書ニ於テ

ノミナラス總テノ法律ニ於テ此諺ヲ用井シ者

トセハ今日ニ至テハ必ズ此非理ノ諺ヲ廢シテ

取ラザル可シ然ラザレバ此諺ノ下ニ國王ハ其

人民ヲ統御スベキ總テノ法律ヲ為ニ統御セラ

レズ又國君及ビ國法ノ妨害トナルベキ為ニ格

別ノ法律ヲ制定スベシトノ意ヲ附加ス可シ

法律ハ人民一般遵守ス可キモノト雖モ特許セラ
ル、者ハ之ヲ守ラズシテ可ナリ特許ノ者ハ法
律ニ明文アリ或ハ法律ニ於テ豫定シタル場合
及ビ豫定シタル制限内ニ於テ許スノ權ハ行政
官ニ附與スルコトヲ得ルナリコードナポレオ

シ法律ハ一般人民ノ為ニ設クルモナリ故ニ
一人ノ為特別ノ褒賞ヲ與ルト雖嘗テ其一人ノ
為ニ非ズ乃チ一般人民ノ為ニ設クルノ法ナリ
法律ノ功力及ヒ施行ハ人ノ身分ニ關シ又ハ領
地ノ境界ニ關スルニ因テペルソ子ール人ニ關
ト又ハレール財產ニ關ノ二者ニ別ツ而シテ古
昔變夷ノ法律ハ別シテペルソ子ールニ屬シ古
昔法律家ノ風習ハ概ネテリトリヤール領ニ屬
ス近世ニ至テ人ノ身分權利ニ關スル法ヲペル

ソ子ールトシ不動産ノ處分全國ノ警保及ヒ安
寧ニ關スル法ヲテリトリヤールトス是即スタ
チュペルソ子ール人ニ關及ヒスタチュレールノ混
同シテ解シ難キ所以ニシテ此分別ヲ知ルハ國
際私法ト云フ所ノ學問ノ旨趣ナリ

第二款 不文法即慣習

第二十一條

不文法ハ第十五條ニ記載シタル如ク其地ノ風
俗慣習ニ因テ成立チ總テノ裁判規則トナリ主
長之ヲ默許セシ者ナリ即チ國民ニ於テ永年問

慣用シテ公然ノ法ト為シ而シテ主長嘗テ之ヲ
禁制セス遂ニ裁判上ノ慣法トナルノ謂ナリ故
ニ不文法ハ國民ノ思意ト主長ノ默許トニ基キ
タル者ニシテ彼ノ成文法ト同ク國民之ヲ遵守
セザル可カラズ而シテ又法律ノ淵源タル者ナ
リ是蓋其本國民ノ思意ニ出ルト雖永年之ニ循
行スル者ハ亦道理アリテ存スレバナリ
古昔草昧ノ世立法ノ本源全ク風習ニ因リシコ
トハ載セテ歴史上ニ瞭然タリ蓋古昔未議院ヲ
設ケテ以テ法律ヲ議スルノ制ナク又百事簡質

ニシテ法律ヲ用ヅルヲ以テ必要トセス唯家族
種々ノ權財產授與ノ權ヲ定ムル僅々ノ規則ヲ
以テ足レリトス而シテ當時ノ人ハ其前世ノ慣
法ニ從ヒ前世ノ人ハ又其前世ノ慣法ニ倣ヘリ
然リト雖世既開明ノ域ニ進ミ各國立法議院ヲ
建テ精確ニ其憲法ヲ定メシニ至ルモ尚人定法
ノ本源ヲ立法者意思ノ外ニアリトスルハ豈之
ヲ信スベケンヤ又慣習法ヲ以テ人定法ニ勝レ
リトスル亦豈之ヲ信スベケンヤ彼ノ獨逸國有
名ノ學者一派ノ說ニ於テハ慣習法ヲ以テ全ク

人定法ノ淵源ナリトシ又ハ成文法ヲ廢立スルノ勢力アリトスルハ世ノ推遷ヲ知ラザルノ古説ニ拘泥スル者ナリ然レドモ近年ニ至ル迄歐洲中ノ學者ヲ奮起セシ所ノ議論ニ於テ亦此説ヲ主張シ其議論今ニ至テ猶絶滅セズ其概略左ノ如シ

佛蘭西ノ「コデフカシ」法律ヲ編成ハ外國人民ノ為ニ頗ル欽羨セラレタリ一千八百十四年ハイデルヘルクノ大學校ノ教官チボノ著ハセシ小冊獨逸國ノ為一般ノ民法書ノ必要ナルコトニ付テ名ケタル書冊

中ニ佛國ノ「コード」ハ獨逸國ノ為ニ利益少ナカラザル可キコトヲ証明セリ然ルニサビニイ小冊法律及ヒ學問ノ為ニ我が今ヲ著ハシテチボニ反對スル説ヲ唱フ其説巧ニナリト雖道理ニ於テ背反スル者ト云フ可レ且其語中「コード」ナポレオン及ビ其作者ニ對シテ頗る嘲弄ノ辭ヲ為セリ此両論チボトサビニイトニ始マルニアラズチボハ英國ノベニタンノ説ニ基ク此佛國「コード」ヲ稱賛スルト嘲弄スルトトノ二議ハ英國ニ於テモ一時相競ヒテ甚

タ盛ニナリセームス、ハンフリズハ一千八百十
 十六年英國ニ於テ法律編纂ノ議ヲ唱へボル
 トンクーパーハ又之ヲ駁セリクーパー所著
 ノ書「ジャンスレリ」裁判所ニ付佛語ニテ翻
 譯セシ者アリ一千八百三十年已理ニ於テ出
 版スル所是ナリ獨逸ニ於テハ右ノ議論未ダ
 絶エズ一千八百四十八年ヴァイデングルクハ
 一書獨逸國ノ法律ニ付テノ著ハシエーナ
 ニ於テ出版セリ
 サビニイ及ヒ其他慣習法家ノ説其主意何クニ

在ル必^ス謂ハン法律ハ一人或ハ社會ノ隨意ニ作
 立セシ者ニアラズシテ恰言語土俗風習ノ各其
 國ニ於テ殊ナルガ如ク自然ニ其國土ニ相適シ
 テ成立ツ所以ノ者ナリ故ニ法ノ慣習ニ仍ラザ
 ル者ハ以テ實ノ法トナスベカラズ何トナレバ
 其慣習ニ仍ラザル者ハ國民意向ノ外ニ出デ、
 其必要ノ實ニ適セズ是ヲ以テ慣習法ハ彼ノ人
 定法及ヒ政府ヨリ指令シタル法ヲ集合セシ所
 ノ「コード」ニ勝レル者ナリト
 道理ト經驗トヲ以テ之ヲ論ゼバ前項ノ論ヲ破

ルニ足ル可シ獨逸國ニ於テ深クコデ、フカシヨ
 ンヲ希望シ既ニ聯邦中之ヲ著手スル所アリ亦
 獨逸國ノ一進歩ト謂フ可シ國ノ「コード」ヲ定メ
 類ヲ分チ編ヲナシ欸ヲ追テ章ヲ序シ編彙粲然
 トシテ紊レズ而シテ全國ヲシテ一律ノ下ニ立
 タシムルコトハ實ニ理ノ至レル者ナリ故ニ「コ
 ード」アルノ國ニ於テハ法律精確ニシテ章條判
 然タルヲ以テ之ヲ解スル甚々易ク裁判ノ實際ニ
 施シ亦甚々容易ナリ若シ彼ノ獨逸國一派ノ學者ノ
 說ニ因レバ法律學ナル者ハ頗高尚ニ似タリト

雖實際裁判ニ於テ欸タラザル者ナリ故ニ其法
 律學者ハ唯一種ノ學者ニシテ「マジスト」トラ裁判
 トナル者ハ却テ甚々法律學ニ達セザル所ノ「ノ」
 オコル中等ニアリ抑法律ノ目的トスル所ハ法
 律學者ヲシテ心性ヲ矯正スル僧官ノ如クナラ
 シムルヲ要セス裁判ノ精確ニシテ且迅速ナル
 ヲ要スルノニ佛蘭西法律施行ノ實際ヲ以テ之
 ヲ考フルモ猶慣法ノ成文法ニ勝レリト謂フ者
 ハ我等ノ取ラザル所ニシテ即佛國實際ノ經驗
 ハ實ニ正確ナル者ナリ一千七百八十九年以前

ハ法律多岐ニシテ一ナラス然ルヲ獨逸ノ學者
流ニ於テハ其條理ナキノ舊態ニ復セントス其
說ニ曰ク慣習法ノ人民ニ利益アル所以ハ慣習
ニ因テ以テ規則ヲ立ルハ人民自由ノ思想ニ基
クヲ以テナリト今其言ニ付テ之ヲ論セン人々
ノ思想ニ由テ規則ヲ設立セバ一國ニシテ一律
ナラザルノ弊アリ然レドモ其弊猶小ナリ甚キ
ニ至リテハ則チ人々ノ思想變易スルアル毎ニ規
則亦隨テ變更シ遂ニ一定確立ノ法ヲ頼ム能ハ
ザルニ至ラン試ニ獨逸法學者ニ向ヒ必ズ慣習法

ヲ遵守セザル可カラザルノ證ヲ問ハバ將ニフ
レクエンツヤ、カ、ズウム舊例ノ多キノ意但シ其例ノ必キモ含メリ
ニ付テノ論ト「ロ」ングム、テン「プ」ス舊時其例アリ
ト意例アリシニ付テノ論ト「フ」以テ對「エ」ントス
此論ノ如クナル時ハ是獨逸ノ學者ハ猶中古ノ
人民慣習ヲ以テ法トスルノ陋習ニ拘泥セリト
謂フベシ今章條瞭然トシテ確乎タルノ法律ア
リト雖モ猶裁判上代言人ノ紛議アルヲ免レズ然
ルヲ古昔法ノ確定シタル者ナキノ時ニ復セバ
其紛擾實ニ勝ユベカラザル者アラントス佛國

ニ於テハ天神ノ保佑ニ倚リテ此成文法典アル
 ヲ以テ遂ニ昔時ノ慣法ヲ廢シテ復テ法律ノ淵源
 ト稱スルヲ得セシメズ故ニ今日ニ至テハ慣習
 ナル者ハ人々遵守ス可キ所ノ法律ヲ生スル能
 ハズ又慣習法ヲ以テ人々遵守ス可キ所ノ法律
 ヲ破毀シ能ハザラシム古人ハ慣法ハ成文法ニ
 勝リ而シテ法律ノ事用ニ適セザル者ハ之ヲ廢
 スルノ權ヲ生ス可キ者トス近時佛國ノ制度ニ
 於テハ彼ノ成文法ニ及スル所ノ慣法ヲ以テ却
 テ成文法ヲ廢スルヲ得ズ且幾時間未ダ之ヲ實

事ニ准擬セザルノ法未ダ實事ニ施行セザルノ
 法アリト雖公然之ヲ廢スルコトナクンバ唯其
 准擬セザルト施行セザルトヲ以テ其法廢セリ
 ト為ス可カラザル者トス例ハ覆審院ニ於テ
 公證人證書ヲ作ルニ當リ其本負或ハ其副負及
 ヒ其證書ニ關シタル証人自ラ出席スルノ法律ニ
 因リテ或ル訴訟ヲ裁判シタリ是ハ佛國中ノ或
 證人助役及ヒ証人等出席スルニシテ其証書
 ヲ其者等ノ家ニ送リテ調印セシムルノ慣習ア
 リシナルベシ然レドモ覆審院ニ於テ其慣習ノ
 如何ニ拘ハラス法律ニ據テ其事ヲ裁判セシム
 云フ即チ成文法ノ慣習法ニ拘泥又一千八百十四
 セザルノ一証ヲ舉クルナリ

年三月ノ法律ノ第九條ハ四十ケ年ノ間之ヲ實
事ニ施行セシコトナシト雖嘗テ廢セルニ非ズ
一千八百四十三年立法官ノ議ヲ以テ始テ此條
ヲ廢ス是ハ嘗テ用ザル所ノ法ト雖廢物ト
佛國ニ於テ人民ニ遵守セシム可キ慣習法ノ存
スルアルハ必ス立法官ノ議ヲ以テ更ニ其法ヲ
確定セシ者ナリ故ニコードナポレオニ中ニ某
ノ事ハ其地ノ慣法ニ從フベク且裁判官モ亦慣
法ニ據ルベキ旨ヲ指導セシコトアリ民法第五
百九十條、第五百九十一條、第五百九十三條、第六

百六十三條、第六百七十一條、第六百七十二條、第
六百七十四條、第一千三百三十五條、第一千五百十九條、
第一千六百十條、第一千七百三十六條、第一千七百五十
三條、第一千七百五十四條、第一千七百五十八條、第千
七百五十九條、第一千七百六十二條、參觀、又一千八
百十一年十二月十三日ノ「イ」見込ヲ以テ參
議院成文法典中ニ定メザル場合ト雖昔時商事
ニ付テノ慣習ハ遵奉スベキ旨ヲ定メタルモ亦
同シ

○第一節 法學者ノ訓條

第二十二條

羅馬ノ法學者ノ無限ニ高尚ナル尊敬及ヒ無限ノ勢威ヲ得シコトハ第百二十二條ニ於テ見ル可シ其法學者ノ論述スル所及ビ之ヲ説明セル所後世ニ至テハ亦以テ一ノ法律トナルノ勢權ヲ得タリ故ニ識者此法學者ノ説ハ羅馬法律ノ原則ノ一部トナル可キ者ト思想スルニ至レリ獨逸ノ法學者モ亦羅馬舊時ノ學者ニ倣ヒ裁判上行為ニ見ハレザル内部ノ事ヲモ是非セントス故ニ自ラ法律ヲ作立スルノ權アル者トナセ

リ加之獨逸ノ法學者ハ羅馬法學者ノ説ヲ以テ亦自ラ任ズ且「アナロジ」ノ方法ヲ以テ法律ノ不備ヲ補ヒ法律ノ進歩ヲ促スベキ委任ノ權アル一社ヲ編制セントス獨逸法學者ハ自己ノ務ニ疎ナリト謂フ可シ佛國法學者ハ然ラズ其説ヲ高尚ニスルヲ欲セズ故ニ佛國ニ於テハ法學者ノ所見及ビ論説ハ直ニ之ヲ以テ法律ト稱セズドクトールノ諸説ハ即チ之ヲ慣習ト稱スベク各作者ノ論説ハ之ヲ法律ノ説明ト稱スヘク而シテ此二者唯慣法ノ一ノ原則トナルノミ法律

明確コトヲカシヨシ具備セルヲ以テ我輩法學
 者自己ノ理論ヲ主張スルヲ得ヤシメズ又自己
 ノ論說ヲ新ニ編シテ之ヲ規則トナスヲ許サズ
 故ニ佛國法學者ハ遂ニ一機軸ヲ出スヲ得ズト
 雖法律ノ下ニ生活スル人民ニ對シ無用空論ヲ
 主張スルノ弊害ニ比スレバ亦甚々確實ナリトス

○第二節 裁判事例學

第二十三條

法律ノ不備不委所缺アル時ト雖裁判官ハ決シ
 テ裁判ヲ為スヲ拒ムヲ得ズ（民法第四條參觀）故

ニ裁判官ハ己ニ告白セシ訴事ニ付必之ニ適施
 スル所ノ法律ノ意ヲ説明セサルベカラズ是裁
 判學ナル者ノ起ル所以ノ原旨ナリ裁判學一ニ
 風習裁判ト云フポルタリス言ヘルコトアリ人
 裁判學ヲ講習セザルヲ得ザルハ猶法律學ヲ研
 究セザルヲ得ザルガ如シト然ルニ人其力ヲ裁
 判學ニ用キルノ度亦豫定シ難キ者アリ即法律
 者或ハ裁判學ヲ尊敬スルニ過ギ其事例ニ對シ
 テ我ガ智慧ノ企及フ能ハザル者トスルアリ又
 夫レニ及シ事例ヲ賤ンテ取ルニ足ラザル者ト

シ彼ノ裁判言渡シナル者ハ唯其言渡シヲ受ク
 ル所ノ人ノ為ノ益ニ益スル者ナリトノ諺ニ陷
 リ風習裁判ナル者ハ聊カモ勢力ナキ者トシ而
 シテ法律ノ外更ニ裁判學ナシトスル者アリ此
 二者皆偏執ノ見ナリ古語ニ曰クニッハ者允ニ其
 中ヲ執レト抑裁判言渡シナル者ハ両造ニ對シ
 テ確實ノ性質ヲ有スルハ道理ニ庶幾カシト雖
 學者ヨリ之ヲ見レバ此言渡ナル者裁判官ノ意
 思ヲ定メシ所ノ根據アラザレハ勢カアル者ト
 ナサズ故ニ裁判言渡シ書ニ於テ其根據ヲ記載

セザル時或ハ根據アリトモ其根據確乎タラズ
 シテ記載シタル時ハ決シテ之ニ勢力ヲ與フ可
 カラズ唯裁判言渡シノ確乎タル根據アリテ活
 動スベキ議論ヲ以テ定メシ者ニシテ其主意明
 晰ナル時ハ殆メテ當ニ之ヲ貴重ス可キノ者ナ
 リ裁判決定ナル者ハ學才優等ナル數人ノ裁判
 官ノ考慮ニ出ツル者ナリ人或ハ裁判決定ヲ貴
 重スル所以ノ者ハ數箇ノ裁判所ノ決定一轍ニ
 出ヅルヲ以テナリトスル者ハ非ナリ其道理ト
 議論トノカアルヲ以テノミ故ニ郡裁判所ノ裁

判時トシテ控訴裁判所ノ裁判ニ勝サリ又控訴
 院ノ裁判覆審院ノ裁判ニ勝サル者アリ
 前條陳述スル所ノ裁判言渡シノ界限ハ唯一事
 ノ決定ニノミ用井ル可キ者トス法律ノ不備不
 委所缺アルニ當リテ其法律ノ或ル條件ニ付テ
 裁判所ノ裁判毎ニ一樣ニ決定シ又ハ多クノ言
 渡シノ例規ニ因テ決定シタル時ハ此裁判事例
 ハ都テ風習裁判ノ位ヲ得テ法律ノ附録ト稱ス
 ルモ可ナリ古語ノ所謂法律ノ意旨分レテ二岐
 ニ。涉ルトキハ國帝之ヲ定ム可ク然レドモ各所

トモ其一方ノ意ニ付テ同ク裁判シタル時ハ法
 律ノカヲ得可シト理ノ當サニ然ルベキ者ト謂
 フ可シ如何トナレバ數度ノ勘査ヲ經許多ノ學
 者毎ニ一樣ニ議定セシヲ真トシテ之ヲ認許ス
 ルハ理ノ歸スル所ナルヲ以テナリ然レドモ裁
 判事例ハ如何ニ永續ストモ又如何ニ一樣ニ出
 ルトモ直テニ之ヲ法律ト稱ス可カラズ若其事例
 立法者ノ意思ヲ誤解シタル者アル時ハ正理ヲ
 守ルノ人カヲ盡シテ其事例ヲ真理ニ復センヲ
 要ス裁判學ナル者ハ立法者ノ意思ニ副テノ正

シキ説明ノミナルヲ以テカヲ得ルト雖其決定
 法律ノ位ヲ奪ヒ得可キ者ニアラズ彼ノ裁判學
 ヲ尊敬スルニ過グル者又ハ羅馬ノ規則中裁判
 ハ例ノミニニ據テ為ス可カラズ當ニ法律ニ據テ
 為ス可シトノ語ヲ忘却スル所ノ者トニ於テハ
 ゼルグハン氏ノ諭言ヲ以テ之ヲ警發ス可シ其
 言ニ曰ク裁判學ハ甚々亞弗利加洲ノ大沙漠ヲ往
 クニ似タリ何トナレバ沙漠中ニ於テ旅人勉メ
 テ先行者ノ足跡ヲ追踵セシニ一時暴風沙ヲ捲
 キ先行者ノ足跡ヲ消没セバ狼狽向フ所ヲ失ハ

ン若シ初メヨリ大陽ノ躔度ヲ目途トセバ何ゾ
 此狼狽アラン法律ハ大陽ナリ裁判事例ハ足跡
 ナリ

第二十四條

裁判事例ノ學ヲ誠實ニ勉強スルハ其益歎カラ
 サルコト前ニ之ヲ詳カニセリ抑人學校ニ於テ
 法律ヲ勉強シ後實地ニ就キ之ヲ精確ニ適施ス
 ルヲ得ルハ即皆裁判學ニ在リデムレン言ヘル
 コトアリ曰ク人學校ニ於テ法ヲ吞ミ裁判所ニ
 於テ法ヲ吐クト宜ナルカナ法律ノ施行ハ其道

理ヲ説明スル論書ニ於テ見ルヲ得ベキニアラ
ス唯裁判ノ事例ヲ集成シタル書ニ於テ學ブヲ
得可キナリ彼ノ學者扨席ノ間ニ於テ著述セシ
所ノ書ハ學問ノ諸說ヲ明ニシ又議論上ノ精密
ヲ究ムト雖裁判所實地ノ辨論及ビ其辨論ノ主
意ヲ究ムルハ唯裁判事例ニ於テ之ヲ明確ニ記
載シ而シテ學生ヲシテ裁判官タルノ才能ヲ啓
發スルニ足ル裁判官タルノ才能トハ訴訟ノ主
意ヲ了得スルニ於テ穎敏且正平ナルト法律ヲ
實地ニ適施スルトノ智カナリ裁判學者タル可

キ者ハ常ニ法律ノ正典ヲ繙閱シ其文意ニ付キ
深ク立法者ノ目的ヲ譯ネザル可カラズト雖實
地ノ屢置ト裁判事例ノ學ニ達セザル時ハ總テ
死學ノ空論ニ騁スル者ト謂フ可シ當今ニ於テ
ハ裁判事例書中每事其決定ノ所以ヲ明載スル
ト全國一律ナルト及ヒ覆審院ニ於テ各裁判所
ノ決定多岐ニ涉リタル者ヲ正シテ一ニ歸セシ
ムルトノ故ヲ以テ學生容易ニ裁判事例ノ學ヲ
為スコトヲ得故ニ裁判事例ノ典籍世ニ裨益ア
ル亦大ナリ而シテ昔時佛國裁判事例ノ書典其

精密學力及ヒ其明確ナルヲ今日ノ典籍ニ勝レ
リ而シテ此古典ノ數亦許多ナリ昔時各裁判所
ハ其許多ノ典籍ヲ具備セリプロスト、ドル、エー
ノ編スル所ノ法律字書中裁判事例ヲ纂輯セシ
入ト云ヘル部ニ百十八人ノ名ヲ擧ケ而シテ猶
其未ニ等ノ字ヲ加ヘタリ是レ其人名百十八人
ニ止マラザルヲ証ス可シ近年ノ裁判事例ノ大
成書左ノ如シ

シリール編スル所ノ一般ノ集ト

ダローズ編スル所ノ一般ノ裁判學

レドリール編スル所ノ裁判所ノ日記

右ノ外ニ各控訴院内ニ別段ノ任ヲ以テ裁判決
定ヲ書キ留ムル所ノ書記役アリ

第二十五條

凡ソ裁判事例ヲ繙閱スル者ハ謹テ宜ク左ノ數
項ニ注意ス可シ

- 第一 編者ノ卷首ニ記シタル題名ノミニ類
ル可カラズ題名中本條記スル所ノ要
旨ト齟齬シタル者少ナカラズトス
- 第二 裁判ノ決定ヲ了得セント欲セハ先ツ

其訴訟ノ主意ヲ了得セシコトヲ要ス
 故ニ同主意ノ事アルニ逢ハバ宜ク各
 編者ノ諸書ヲ涉獵比較ス可シドムレ
 シ言ヘルコトアリ主意一毫ノ差アレ
 ハ法律ハ大差違ヲ生スル者ナリト
 第三 覆審院ノ裁判決定分ツテ二トナス曰
 ク^レ不^レ准^レ判^レ曰ク破毀二者ノ例規ノ内破
 毀ノ例ヲ撰ブ可シ不^レ准^レ判^レ又分ツテ二
 トス受付局ニ於テ直ニ下^ケ戻ス者民事
 局ニ送致シテ後^チ民事局ヨリ下^ケ戻ス者

此二者ノ内民事局ヨリ下^ケ戻ス所ノ例
 ヲ撰ブ可シ
 覆審院ハ他ノ裁判所ノ裁判法律ニ背キタル時
 ノミ之ヲ破毀スル者ニシテ其裁判事理ニ違フ
 タルヲ破毀スル者ニアラス又訴訟ニ付テ^テ証
 書法律ニ據テ確定シタル者ニ非サレバ其証書
 ニ付テ^テノ違誤ノ為ニ他ノ裁判ヲ破毀セズ故ニ
 覆審院ノ不^レ准^レ判^レ民事局ヨリ出ル者ト雖^モ其原裁
 判必^ズ法律ノ真理ニ適フタルト否トヲ証シガタ
 シ之ニ反シテ他ノ裁判ハ上告ヲ受ケテ之ヲ破

毀スル所ノ事ハ必ス一ハ確乎不動ノ道理ヲ以テ
 スル者ナリ是、不准判ヲ取ラズシテ破毀ノ裁判
 ヲ取ルベシトスル所以ナリ民事局ハ不准判ハ
 受付局ノ不准判ニ勝レリトスル所以ハ即民事
 局ニ於テハ一旦兩造ヲ呼出シ審明ノ後ニ非ガ
 レバ其訴狀ヲ下ケ戻スコトナシ受付局ハ不准判
 ハ許事審明ヲ要スルニ足ラズトスル時ハ直ニ
 之ヲ戻スヲ以テナリ
 覆審院ノ決定ハ優等ナル學力ヨリ生スル者ト
 雖モ其勢力ヲ以テ一般裁判所ノ決定上ニ蒙ムラ

シムベキ者ニアラズ千八百二十七年四月一日
 ノ法律ヲ以テ左ノ改革ヲナセリ
 覆審院原裁判所ノ終審裁判ヲ破毀シテ他ノ裁
 判所ニ付セシニ其裁判原裁判ニ同シキヲ以テ
 兩造中又同前ノ辯論ヲ以テ上告シタルトキハ
 覆審院ノ三局刑事局 民事局共同シテ之ヲ審明ス
 ベシ而シテ猶他ノ裁判所再度ノ裁判モ亦最初
 ト同議ヲ以テ破毀スル時ハ其破毀ヲ受クル所
 ノ裁判所ハ其訟事ニ付テ覆審院ノ判決ニ從ハ
 ザルベカラズ然レドモ注意ス可キハ覆審院ノ

最終ノ判決ハ其審明セシ所ノ訴訟ニ於テハミ
 法律ノカタル者トス故ニ破毀ヲ受ケタル所ノ
 裁判所ハ必ズ之ニ從ハザル可カラズト雖モ他ノ一
 般ノ裁判所後日同様事件ヲ審明スル時ニ當リ
 必シモ覆審院當時ノ判決ニ據ルヲ要セス其判
 決ハ他ノ裁判所ニ於テ之ヲ一ノ裁判事例學ノ
 推理トスルノ外他ノ勢力ナキ者トス然ルヲ人
 或ハ此法律ハ覆審院ヲ立法權内ニ合シ憲法ニ
 背戾セリトスル者ハ誤レリト雖モ此法律ヲ以テ
 覆審院裁判事例ノカヲ増進スル者ト謂フ可シ

到底覆審院再度ノ審理ヲ經タル者ハ其判決ハ
 理精確ニシテ又動カスベカラズ故ニ嘗テ其破
 毀ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ其同事件ノ訴訟
 ハ覆審院舊判決ノ理ニ從ヘバ兩造者ノ幸福タ
 ル少カラザルナリ

○第二章 人定法ノ區分

第二十六條

凡ソ權利ト義務トヲ生スル所ノ關係三アリ一
 ハ國內人民相互ノ間ノ關係一ハ政府ト人民ト
 ハ間ノ關係一ハ國ト國トノ間ノ關係是ナリ之

ニ因テ考フレバ人定法ハ三大別スベシ其三大別ハ又種々ノ小區分アリ
國內人民相互ノ權利義務ヲ定ムルヲ主トスルハ規則ヲ私法ト云フ即チ羅甸語ノ「ユスプリダ」ト云或ハ「コスインテル」ト云フ者ナリ政府ト人民トノ間ノ權利義務ヲ定ムル規則ヲ公法ト云ヒ國ト國トノ關係ヲ限制スル所ノ規則ヲ萬國公法即チ國際法ト云フモンテスキ
氏ノ說其順次ヲ殊ニスト雖亦其區分ハ異ナルナシ其說ニ曰ク地球ノ大ナル人民ノ多キ必

ズ各種國民ノ區分ナキヲ得ズ既ニ其區分アル時ハ亦其間ノ關係ニ付テノ法律ナカルベカラズ即チ國際法是ナリ人必一社會ヲ為ス社會ハ之ヲ保護スルノ術ナカルベカラズ故ニ其之ヲ保護セラル、者ト其之ヲ保護スル者トノ間ノ關係ニ付テノ法律ナカルベカラズ即チ政法是ナリ又一般國民相互ノ關係ニ付テノ法律アリ即チ民法是ナリ
○第一款 私法
第二十七條
前條ニ言ヘル如ク私法ハ人民相互ノ關係ヲ定

ムルヲ主トスル所ノ法典ナリ此關係種々ノ區
 分アリ其數少ナカラズ故ニ其關係ヲ定ムル所
 ノ法律ハ其旨趣廣大ニシテ之ヲ學バント欲ス
 ル者甚容易ナラズ蓋シ私法ハ法學中第一ノ切
 要トス是ヲ以テ今此卷首ニ置ク然レドモ又理
 ヲ以テ之ヲ論スレバ私法ノ施行ヲ定ムル所ノ
 公法ヲ以テ卷首ニ置カザル可カラズベクン氏
 曰ク私法ハ公法ノ保護ヲ受クル者ナリト夫レ
 私法各種ノ規則ハ唯日用欠クベカラザルノミ
 ナラズ須臾モ離ルベカラザル者ナリ故ニ人總

テノ法學ヲ學バザルベカラズト雖特ニ私法ヲ
 研究セザルベカラズ私法ヲ分テ左ノ二類トス
 一ツヲ論理私法即民法トシ一ツヲ現行私法即
 訴訟法トス或ハプロセデュールシルルトス

○第一節 民法

第二十八條

民法ハ人々各自ニ屬スル所ノ諸權ト人々互ニ
 必行セシムルヲ得キ諸權トヲ定メ且訴訟權訴訟權
 ヲ定ムル者ナリ訴訟法ハ人々各自ニ有スル所
 ノ權ヲ裁判上ニテ行ハシムル為ニ出訴ノ方法

指示シ且其方法ヲ規則立ツル者ナリ故ニ訴訟
權ト出訴トハ全ク異ナリトス

民法分ソテ二トス一ヲ普通民法トシ一ヲ特別

民法トス普通民法ハ人民一般ニ關ス特別民法

ハ特別ノ事ノミニ關ス此二者ノ區分ハ全ク人

意ニ出テ法ノ性質ヨリ生スル者ニアラズ故ニ

立法ノ種類ニヨリテ其區分一ナラザルナリ

伊普通民法

第二十九條

昔時羅馬人ハ國民設立シテ遵守スル所ノ總テ

ノ法典ヲニスシテ云ハル故ニ羅馬ノ法

律學者ノ說ニ從ヘバユスシテハ公法商法

刑法等ヲ包ヌ猶人定法ト曰フガ如シ然ルニ近

世ニ至リ此ユスシテハ詞意全ク變レテ人

ト人トノ關係ヲ規則立ツルヲ目的トスル法典

即チ私法ノミヲ云フ故ニ普通民法ハ羅馬ノ法學

者著ス所ノ議論及ビ佛國民法編述者ノ基礎ト

セシ如ク人事物品及ビ訴訟權ニ付テノ規則ノ

ミヲ包ヌ(訴訟權ハ訴訟ノ方法ト誤リ混スベカ

ラズ)此人事物件及ビ訴訟權ノ三者ヲ區分シタ

ル旨意ノ如何ヲ究メザルベカラズ然ルニ獨逸ノライプニツ以来多少ノ法學者此三者ノ區分ヲ非トスト雖更ニ之ニ換フベキ精確ナル區分ヲ議定スル者ナキヲ如何セン

人事法

人事法ハ民事上當然ノ務ヲ指示ス所ノ

規則即各人民權ヲ有シ又其權ヲ行フコトニ付テ有シ得バキ規則ノ集成ニシテ所謂人民ノ身位ナリ此身位ハ人ノ生國住所及ト身體ノ據子ニヨリテ變スル者ナリ身體ノ據子トハ即懷胎出產男女人種年齡體ノ強弱疾病等ノ者ヲ云フ

ナリ抑人事法ハ主トシスミナリキ家屬法又ハ家屬ト社會トノ間ニ生スル所ノ權ニ付テノ關係ヲ論ズト婚

姻ノ契約親タル事子タル事私生ノ子ヲ認ル事及ヒ公生ノ子トスル事養子ノ事テタルオスレシ

トズノ事親ノ權等而シテ家屬ニ近キ者ハ後見人及ヒ管財人ナリ是等ハ即婚姻ノ早ク解ケシ

ヨリ生シキムラト未丁年キムラト或ハ又親ノ權ヨリ生シ後見免カル、事或ハ又人ノ戸主タル能ハザルニ付

テ風癩生スル者ナリ

物品法 物品法ハ人ト物トノ間ノ關係ヲ定ムル

所ノ規則ノ集成ニレテ人ノ世上ノ諸物ヲ用并
ルコトノ權限ヲ定ムルヲ要トス故ニ又如何ナ
ル方法ヲ以テ其權ヲ求メ得ヘキカヲ定ムルコ
トヲ要トスル者ナリ此法ハ所有權ノ理及ビ其
權ヲ求ムルニ付キ種々ノ方法ノ理ト相待テ離
レザル者トス又所有物ノ種々ノ變化ヲ論レ從
テ又永年限ヲ以テ土地等ヲ貸與フル等ノ事及
ビ土地ノ權義書入質ノ如キ入組ミタル權ノ消
盡ヲ論ス而シテ物ヲ所持スルコト亦物品法ニ
關係スルコトアリ然レドモ直ニ之ヲ此法ニ屬

スト云フベカラズ何トナレバ所持ハ後日ニ至
リ所有權ヲ生スベシト思度ヲ為シ得ベシト雖
自ラ其權ヲ生スベキノカアル者ニアラズ故ニ
能ク其部類ヲ細別シタル民法書ニ於テハ所持
ノ理ヲ以テ物品法ノ外トス相續權モ亦然リ蓋
シ相續權ハ死者ノ所有セシ所ノ品物ニ付テ所
有權ヲ求ムル方法ナルヲ以テ物品法ニ屬スベ
キ者ノ如シト雖モ此所有權ハ一般ノ權ニテ物ヲ
求ムルコトノ一ノ方法ニシテ猶死者ノ財產ノ
全部或ハ一部ト云フガ如シ相續權ハ死者ノ所

有權ヲ付與スルノミナラス總テ其死者ニ屬シタル貸借金ヲモ併セテ付與スル者ナリ故ニ能ク部類ヲ細別シタル民法書中ニ人ノ種々ノ權ヲ定メタル為ニ義務ト云ハバ貸金即チ所有金ナリト云フガレバ借金ナリノ理ヲ先キニ此相續法ノ理ヲ後チニスル者多シ

訴訟權

訴訟權ハ人民相互ニ義務ヲ遂ケレムベキ一時ノ關係ヲ管理スル所ノ成典ナリ夫レ義務ハ人ノ他人ニ對シテ為スベキ事又ハ為スベカラザル事ニ付キ裁判ニ關係スル要件タリ此

要件ハ契約又ハ犯罪ニヨリテ生シ或ハ契約又

ハ犯罪ニアラザレドモ亦法律上ニ於テ契約又

ハ犯罪ニ准シテ義務ヲ生スルコトアリ

又准犯罪古法律ニ於テハ證據ノ為契約ノ成跡

ヲ公ケニスル為又特別ニ契約ニ確タル力ヲ與

フル為ニ契約ニ付テ種々ノ嚴格ナル法式及ビ

効トナルベキ法式ヲ要トセリ當今ニ至リテハ

契約ハ一般人々互ヒノ承諾ニ任カセ雙方意思

ヲ陳述スルノミヨリ生ズル者トシ古ノ法式存

スル者甚稀ナリ故ニ近世ノ種々ノ契約中格段

ノ法ヲシト云フベカラズト雖モ之ヲ古ニ比スレ
バ頗ル自由ナリトス

契約ハ羅馬法ノ道理ニ於テハ人^{ドローブルツ}權ノ外他ノ成
効ヲ有セザリシ今日ニ及ビテハ契約ノ關係
頗ル廣大ナルニ至リ物權ノ關係ヲ生スル者ト
ナレリ但物品法ト訴訟權トノ間ノ差別ニ至テ
ハ佛蘭西ノ法律猶未ダ羅馬法律ノ綿密ナルニ
及バザルナリ

呂特別民法
ドローブルツ
ドローブルツ
ドローブルツ

第三十條

特別民法ハ普通民法ト異ニシテ貴賤ノ品等ニ
應シテ各箇ニ之ヲ管理シ又ハ人々關係ノ或ル
種類ニ應シテ之ヲ管理スル所ノ成典ナリ既ニ
上ニ論スル如ク此區分ハ法ノ本旨ニ非ズ又各
國法律ノ形狀ニヨリテ其精疎ト其廣狹ヲ殊ニ
セリ例ヘバ佛蘭西ニ於テハ法律上共和論ト均
齊論トノ理論多キヲ以テ他ノ種々ノ特權ヲ許
可スル國ニ比スレバ此例稀ナリトス種々ノ特
權ヲ許可スル國ニ於テハ貴賤ノ品等ヲ數等ニ
分テリ即獨逸ニ於テハ王公貴族又ハ農工商又ハ

ユダ州人ノ為ニ種々ノ特別法ヲ設クルガ如シ
 佛國ニ於テ特別法ト稱スベキ者ハ唯商法アル
 ノミ此法アル者ハ商業又ハ商業ニ關スル種々
 ノ事項ハ常法ヲ以テ論ズベカラザレバナリ人
 ノ別段ナル品等ノ或ル關係ニ付キ固有ノ性質
 ノ為格別ノ規則ヲ設クベキ場合ニ於テモ之ガ
 為ニ別ニ私法ヲ設クルニ及バズ故ニ佛國ニ於
 テハ王族ノ為ニ身上證書、婚姻、後見人、アクト、デ、タ、シ、ン、サ、ル、 歳俸ニ付
 テハ格別ノ規則アリト雖モ特別民法ヲ作立スル
 ラ得ズ若シ之ヲ作立スルヲ得ベシトセバ又兵

卒、幼者、私生ノ子、婦女、及ヒ或ル由縁ヲ以テ格別
 ノ規則ニ從フベキ者又一般ノ規則中ノ特許ア
 ル者等ノ為ニモ一々之ヲ設立セザルヲ得ズ實
 ニ此ノ如クナル時ハ私法ヲ分類スル際限ナキ
 ニ至ルノ弊アラントス

○第二節

訴訟法 シ、ウ、テ、フ、ク、ラ、ク、ア、フ、セ、ニ、ル、ニ、キ、ル

第三十一條

訴訟法ハ既ニ第二十八條ニ論ゼシガ如ク我權
 利ノ妨害ヲ除クガ為裁判上ニ於テ國民ノ用井
 ルベキ手續ト方法ニシテ即民法ノ効ヲ全クス

ル者ナリ何トナレバ各其權利ヲ固持スベキノ
方法ナケレバ終ニ其權ヲ失フニ至ルベシ各人
ノ權利ノ抵觸スルニ因リテ生スル争訟ヲ審判
スル為政府ハ裁判官ヲ命シ又訴訟者ノ遵フベ
キ手續ヲ示スコトヲ必要トス而シテ各裁判所
ノ位置及ビ其權限ハ公法ニ屬スト雖訴訟法ハ
私法ニ屬ス蓋シ裁判ハ政府ノ任ナレドモ訴訟
法ノ規則ハ各人ノ私權ヲ論シ其財產保護ノ為
人民ノ用井ル手續ニシテ直ニ政府ニ關係セザ
レバナリ

○第二款 公法

第三十二條

公法ハ政府ノ總テノ義務ト權利ヲ定ムル所ノ
種々ノ成典ナルハ既ニ第二十六條ニ於テ之ヲ
論セリ抑國民一般利益ノ為名代ナル政府ニ直
ニ關係アル法律ハ之ヲ公法ニ屬ス而シテ其關
係ニ三アリ即チ政府ノ成リ立チニ關スル者之ヲ
建國法ト云ヒ國家ノ政事ニ關スル者之ヲ政法
ト云ヒ國家ノ保持ニ關スル者之ヲ刑法ト云フ

○第一節 建國法即チ政體

第三十三條

國ハ元來吾人相互ノ自由ヲ保護スル為ニ社ヲ
 結ビシ者ノ集合シテ一大社會ヲ成シ政府ヲ立
 テタル者トス其社會ニ入ル時人或ハ謂ヘラケ
 我固有ノ自由ノ幾分ヲ損スル者ナリト是自由
 ノ意義ヲ誤解セシ者ナリ政府ハ保護ノ義務ヲ
 擔任スル所ニシテ人民自由ノ幾分ヲ損スル者
 ニ非ズ抑政府人民ノ自由ヲ保護スルトハ人民
 ヲシテ放縱ナラシムルノ謂ニ非ズ人民ヲシテ
 非理相干スコトナク各其權利ヲ得セシムルノ

自由ヲ保護スルハ

謂ナリ

政府ノ原因ハ歷史上ニ於テ瞭然ナラザレドモ
 政府ノ人民ニ對スル義務人民ノ政府ニ對スル
 義務ハ其淵源自然法ニ基ツク此義務ノ關係ヨ
 社約ト云フ是レ默許ヨリ生スル者ナリ此社約
 ハ人民政府ニ從ヒ政府人民ヲ保護スル所ノ双
 方ハ契約ナリ然レドモ其實我等ノ祖先真ニ此
 契約ヲ為シ子孫ヲシテ繼承セシムル遺物ノ如
 キニ非ズト雖因襲ノ久キ人々自ラ之ヲ認メ日
 常行為ノ間ニ於テ政府ト義務ヲ交換シ来リシ

法學抄録

第三十條

四十五

者ナリ故ニ政府若シ或ル人ヲ保護スルコトヲ
 怠ルトキハ其人ノ遵從ヲ求ムル能ハズ又或ル
 人政府ニ遵從セサレバ亦其保護ヲ求ムル能ハ
 ズ
 社約ハ之ヲパクト、ドレユニオン結合スルコト
 パクト、ドスミシオン從フコトトノニツニ分ツ
 然レドモ固ヨリ同時ニ成リ立ツ者ニシテ其實
 ハ一ナリパクト、ドレユニオンハ國民一般互ニ
 其權ヲ保持スル為ニ其心ヲ一致セシ者ナリパ
 クト、ドスミシオンハ國ノ目的ヲ達スル為一般

國民ノ名義ヲ以テ其方法ヲ撰定スルコトヲ默
 許シタル者ナリ反覆之ヲ言ヘバ一般ノ國民國
 ノ目的ヲ達スル所ノ方法ヲ撰ビ又其方法ノ施
 行ヲ或人ニ委託スルコトヲ許諾スルナリパク
 ト、ドスミシオンハ社會ノ為必要トス如何トナ
 レハ各種ノ方法ニ付各人ヲシテ一致セシムル
 能ハザルハ固ヨリ言ヲ待タズ故ニ各人ノ名義
 ヲ以テ其方法ヲ撰定シ之ヲ施行スルノ權ハ必
 ス或人ニ委託セザルベカラザルナリ
 國民ノ委任ヲ受ケ此權ヲ執ル者ハ即無形或ハ

有形ノ主長ナリ主長ハ獨立シテ不保任ノ者ト
 ス抑國民協同シテ此權ヲ主長ニ托ス故ニ主長
 ノ心ハ即國民ノ心ナリ國民ハ獨立セル者ナリ
 主長其獨立セル國民ノ心ヲ以テ心トス故ニ主
 長ハ必ず獨立ナラザルベカラズ且主長ニ保任
 アル者トセバ又其所為ヲ判スル者ナカルベカ
 ラズ然ルトキハ其判者即眞ノ主長ナラン故ニ
 主長ハ必ず不保任ノ者トス
 主長執ル所ノ權分テ三トス監督ノ權立法ノ權
 施行ノ權是ナリ監督ノ權トハ主長國ノ目的ニ
アワルルニキチナリ

關スル一切ノ事ヲ審ニシテ國ノ安寧ヲ害スル
 コトノ有無ヲ視察シ國民保護ノ方法ノ有様ヲ
 議スルノ權ナリ立法ノ權トハ國ノ目的ヲ助ク
 ル一切ノ事ヲ全國ニ關スル方法ヲ以テ之ヲ定
 ム之ヲ一般遵守セシムベキ方法ヲ定メ及ビ國
 ノ目的ヲ妨グル者ヲ除クベキ各種ノ方法ヲ定
 ムルノ權ナリ施行ノ權トハ立法權ヲ以テ定メ
 タル方法ヲ實施スルノ權ナリ而シテ裁判權ナ
 ルモノハ施行權ノ一部分ニシテ其方法ノ格別
 ナル者ナリ

「バクト、ド、スイ、ン、ヨ、ン」ノ定ムル所ノ各種ノ法ヲ
 合シテ之ヲ政體ト云ヒ或ハ政府ノ形狀ト云ヒ
 又建國法ト云フ其各種ノ法ハ之ヲ詳細ニ記載
 シタル者ニシテ主長ノ權利ト義務ト其及ブ所
 ノ區域ヲ定ム或ル國政ノ形狀ヲ定ムル所ノ法
 ハ殊ニ之ヲ建國法又ハ國約書又ハ政體ト云フ
 而シテ此根本タル各種ノ法ヲ括シテ建國法又
 ハ政體ト云フ

○第二節

政法

トリスノミニスラチーフ

第三十四條

前條ニ説ケル如ク政府即チ國既ニ成レバ則チ社會
 ハ其目的ヲ達スル為必其統御ヲ受クベシ之ヲ
 詳説スレバ政府ハ社會ノ命脈ヲ保存スル為ニ
 必要ノ方法ヲ完備セザルベカラズ其方法ノ運
 用ヲ定ムル各規則ヲ政法ト云フ夫レ國ハ建國
 法ヲ以テ精神トシ政法ヲ以テ身體ト為ス所ノ
 無形人ナリ其無形人ハ必供給ヲ要ス其供給ハ
 國有地ヨリ取ルベキカ將タ人民ニ課スベキカ
 之ヲ課スレバ其額幾許ニシテ何ノ方法ヲ以テ
 スベキカ警察及ヒ海陸軍ノ編制ハ如何教育ノ

進歩產物ノ蕃殖ハ如何争訟ハ誰カ之ヲ裁判シ
又如何ナル手續ヲ以テ之ヲ裁判スベキカ是等
ヲ規定シタル者ヲ總テ政法ト云フ其他ハ各國
政體ノ異ナルニ隨テ亦各種ニ分ル

第三節 懲罰法

懲罰法

第三十五條

政府即チ國既ニ成リ以テ社會ヲ統御ス然レドモ
亦未ダ以テ寬備トナスベカラズ必ヤ其自ラ護
ルノ道ニ於テ心ヲ用井人民ヲシテ法ヲ遵行セ
シメガルベカラズ然ラザレバ政府ハ遂ニ廢滅

罰ノ義理

ニ至ラン故ニ人民ハ必其政府ノ法ニ遵フベキ
コト言フ待タズ他ヨリ此國ニ來リ或ハ居留ス
ル者ト雖亦必其法ニ遵フヲ以テ義務ト為スベ
シ主長其人民ヲ柔順ニ導クノ術ニツアリ一ハ
教育ヲ進ムルニ在リ一ハ懲罰ヲ設クルニ在リ
人民ヲ柔順ニ導クハ獨リ教育ノ以テ足レ
リトセズ懲罰ヲ設ケテ其不足ヲ補フハ理勢ノ
己ムフ得ザル所ナリ罰ハ罪犯アリテ後ニ之ヲ
施スベシ常ニ之ヲ用井テ人ヲシテ法ニ遵ハシ
ムベキノ具ニ非ズ抑人民ハ法ニ遵フベキノ義

務アリト雖尚之ヲ犯ス者ナキニ非ズ罰ハ只其
 體ヲ責ルノミニシテ完全ナラザル者ト雖之ヲ
 用井ルハ法ノ力ヲ添ヘ法ヲシテ確實ナラシム
 ル者ナリ懲罰法ハ法學ノ一部分タリ主長ノ罰
 ヲ施スニ如何ナル場合ニ於テ如何ナル手續ヲ
 以テスベキヲ定ムルハ即法學ノ一部分タル所
 以ナリ

懲罰法ハ公法ニ屬センカ私法ニ屬センカ懲罰
 法ハ政府ト法ヲ犯ス者トノ間ノ關係ヲ定ム故
 ニ公法ニ屬スル者ナリ犯罪者ノ為ニ損害ヲ受

ル者ノ訴訟權ハ告訴ト異ナリト雖相待テ離レ
 ザル者ナリ犯罪ノ訴ニ因リ其犯人ヲ探索スル
 ハ犯人ト政府トノ間ニ關ス故ニ縱令被害者其
 損害ヲ宥恕スト雖檢官ニ於テハ其訴ヲ止ムベ
 カラズ如何トナレバ檢官ハ被害者一人ノ為ニ
 訴フルニ非ズ國ノ安寧ニ於テ妨害ヲ受ケタル
 一般人民ノ為ニ訴フレバナリ
 懲罰法亦私法ト同シク刑法ト治罪法トノニニ
 分ツ罪ノ輕重ヲ定メ又其罰ノ寬嚴ヲ定ムルハ
 之ヲ刑法ト云ヒ犯人ヲ探速シ其證據ヲ舉ケ罪

ヲ決スルハ之ヲ治罪法ト云フ

伊 刑法

第三十六條

刑法ハ刑ヲ施スノ本タル原理ヲ定ム第一刑ヲ施スノ權ノ原因何ニアルヤヲ定ム近年刑法學者論スル所其旨意一ナラズ或ハ「ビ」スキース、アブソリウニ人ノ法ヲ犯スハ一般ノ安寧ヲ害ス故スナルノ理ヲ主張シ或ハ「レ」グンシヨク、パールチクリエルド政府ハ人ヲ束縛スルノ理ナシ然レ特權ナルノ理ヲ主張シ或ハ「レ」アンヂレ

クト一人ヲ懲シテ萬人ヲノ理ヲ主張シ或ハ「レ」ルレクシヨク、デマウフエツール人ノ惡ヲ矯正ノ理ヲ主張ス第二刑法ハ人ノ行為如何ナル形狀ニ施ス者トスルヤ又法律トシテ定メタル各種ノ刑ハ幾部類ナルヤヲ定ム是レ刑法ノ學問人定ニ屬スト雖此學ハ人ノ生命人ノ自由及ビ人ノ名譽ノ如キ人間第一ノ貴重ナルコトヲ取扱フノ旨意ヲ論ス故ニ刑法學者ハ理論及ビ自然法ノ源ニ溯リテ刑法ノ本タル不易ノ道理ヲ理論ト自然法中トヨリ發見センヲ要ス

呂

治罪法
ドローンストリクレンクミキール

第三十七條

刑法ニ因テ定ムル所ノ刑ヲ施スニ當リ先ツ犯人ヲ探索シ其罪ヲ定ムルヲ以テ治罪法ノ目的トスルハ既ニ三十五條ニ於テ之ヲ論セリ今此ニ治罪法ハ何ヲ以テ成立ツヤヲ言ハン夫レ刑ハ冤枉ナク僥倖ナク必_ズ其犯人ニ適施センヲ要ス故ニ犯者アルヲ知レバ必_ズ其證據ヲ糾シ豫ソ其犯者ヲ定ノサルベカラズ凡ソ此證據ヲ糾スノ務ハ警察官吏ノ責タリ警察官吏ハ其務ヲ盡

スガ為治罪法ニ從ハザルベカラズ訴訟ノ法ハ私法ノミニ關スル者ナリ如何トナレバ訴訟法ニ於テハ不能力者又ハ不在者ノ為ニスル、外檢官ハ與カラズ然レドモ治罪法ニ於テハ檢官ノ務實ニ必用タリ如何トナレバ其原告ハ社會ノ代理ニシテ罪人ノ裁判ヲ請ヒ又其犯人ヲ有罪トスルヲ主張スルハ社會ノ安寧ニ於テ損害ヲ受ケタルヲ以テナリ

法學指鉞第二冊

法學指鉞第二冊終

明治九年十二月十五日板權免許
同 十年九月出版

長崎縣士族

筆受者惣代 正七位 長 森 敬 斐

東京第三大區二小區麴町
山本町一丁目一番地寄留

東京府平民

出版人 從六位 櫻 井 能 監

東京第四大區二小區今川
小路二丁目七番地

發兌書肆 金 港 堂

同 第一大區五小區本町
三丁目十七番地



米國ウエルベツキ氏口譯
忘筌社負筆受

法學指針

第一帙

明治十年九月出版櫻井氏蔵梓